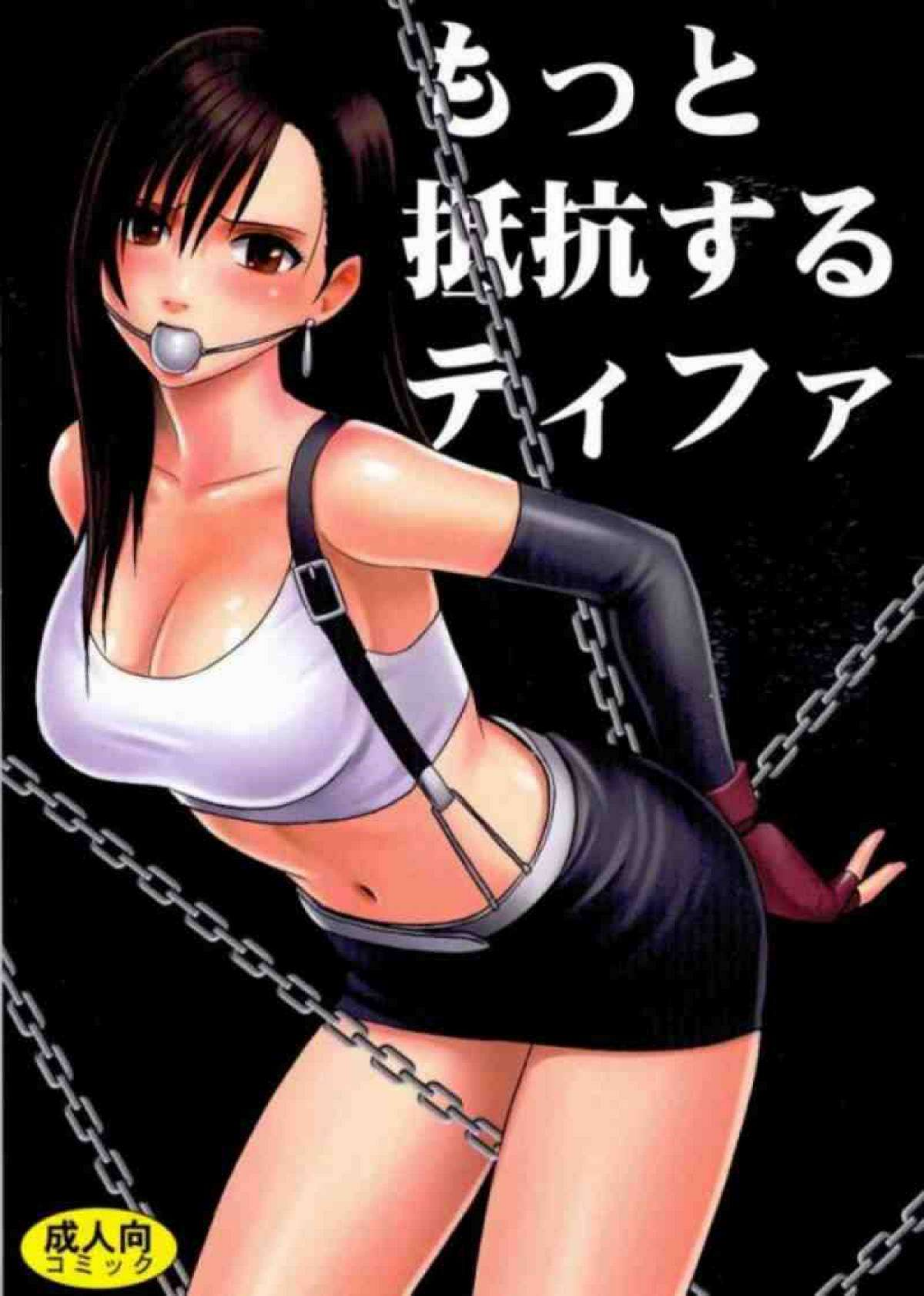
もっと抵抗するティファ



成人向コミック

5種類のマルチエンディング！5回の処女喪失！

・情報屋との交渉、巨乳を揉まれまくり

・レズ女によるヌルヌルボディチェック

・女体オークション、マシンで無限イカせ地獄

・乱交パーティーに潜入

・変態男の陰湿プレイ、最強のクスリで悶絶

●１８歳未満の方は購入できません

この本は途中で選択肢があるゲームブック方式です。
選択肢の数字にそったページ数に移動しながら読んでください。

今日もクラウドは何もしゃべらない。
静かに椅子に座り、無表情のままどこか一点を見つめ続けている。
「ほぁ……」
思わずため息が出てしまって、私はあわてて手で自分の口を塞いだ。
一番辛いめにあっているのはクラウドなんだから、
私がため息なんてついちゃいけない。
ライフストリームに飲み込まれた影響でクラウドは廃人になってしまった。
大きな精神的ストレスと重度の魔晄中毒、その両方に苦しめられている。
ごめんね、クラウド……ちょっと出かけてくるね」
私はそっと彼の肩を撫でながら立ち上がる。しなやかな筋肉の弾力。
でも少し細くなったような――。
(さて……良い情報があるといいんだけど)
ここ数日、ずっと情報屋に通いつめている。
クラウドを元に戻せる手がかりを探してのことだった。
ただ、成果や成功の見込みを期待してというよりは、
溺れるものがワラをつかむような感覚といえるかもしれない。
(多分無駄だってことはわかってる……。)
(でも、何かきっかけになるようなものが見つかれば……)

『あんたか？　頭がイカれちまったやつの目覚まし薬が欲しいネーチャンってのは』
情報屋が韓旋してきたのは、怪しげな風貌の男。
まあ、情報屋にまともな人なんてなかなかいないんだけど。
「イカれてるなんて、失礼な言い方しないでちょうだい」
『へへっ、それは悪かったな。まあ、モノは確かなんだ。きっつい薬で……どんなやつでも覚醒させる効果がある』
「……麻薬？」
『そんなのと一緒にしないでくれよ。
れっきとした医薬品、新薬さ。
ただ、まだ許可が降りてなくてね……。
しかし重度の麻痺中毒患者を覚醒させたらしいぜ』
「麻痺中毒を！？」
私が食いつくと男はニヤリと笑った。
『高いぜ、この情報』
「……いくらなの？」
男は笑みを隠すことなく、じろじろと私の身体を見る。
上から下までなめまわすように……
特に、胸の辺りをじっくりと見てくる。
正直、気分が悪い。
でもせっかくの手がかりになるかもしれない情報だ。
私は黙って耐えた。

『そうだな……ちょっと耳を貸しな』
たっぷり私の身体を見た後に、男が口を寄せ、
金額と同時に『とある条件』を伝えてきた。
（最低……！）
金額は法外といえるほどに高かった。
それだけこの情報がレアなものなのか、
単にふっかけているだけなのかはわからない。
確かなのは、今の私の手持ちだと
とても払えないということと、
もうひとつの『条件』ならなんとかなるということだけ。
（……クラウドのためなら……）
「……わかったわ。お金は払えないから、
もうひとつの条件のほうでお願い」
『へへへへ……じゃあ、ついてきな』
情報屋の男がだしてきた『条件』は単純なものだった。
そのデカイ胸を揉ませろ――。

「む…胸を揉むは外は何もしない。約束よ…！」
「わかってるさ、そんな怖い顔するなよ」
ニヤニヤと笑う男。
これからこんなやつに自分の身体を触られると思うと吐き気がする。
だけど……情報のためには仕方ない。
『そうそう　手はひざの上だ…抵抗するなよ…？』
抵抗したら情報は教えないぜ？』
「さ…さっさとしてよ」
『じゃあ遠慮なく』
男の太くて汚い指が私の胸に触れた。
それから遠慮も何もなく、手全体をつかって強く揉み込んでくる。
「く……」
『おっと、痛かったか？　痛かったら言えよ。オレは紳士だからよ』
男は私の表情を真横からじっくり観察しながら、丹念に指を動かす。
「あ……う」
……いやらしい手つきだ。
ずっと触られていると、
段々何がどうなっているのかわからなくなってくる。
男の指の動きを追いきれず、翻弄されてるみたいで――。
『声出してもいいんだぜ？』
「……ッ」
調子にのった男の言葉に無視を決め込む。
『そんな強情な子にはこうだ』
「……んっ！……」
男の人差し指が胸の先端のまわりをひっかいた。
乳首そのものを触るんじゃなくて、
円を描くようにまわりにくるくると爪を這わす。
「く……はぁ……」
思わず声が上がってしまったけれど、ただの生理現象だ。
誰だって、いきなり違うところを触られたら声が出ちゃうはずだし。
(こんなことくらい、クラウドの苦しみと比べたら
何でもないんだから……心を無にして、耐えないと…でも…)

●本気で怒る→ 9

●まだガマンする→ 4

「あ……はぁ、う……く、はぁ……」
室内にある時計を見ると、もう30分も経っていた。
(こいつ……いったいいつまで!)
「ん、はぁ、ん……う、はぁ、はぁ、はぁ……」
(こんなに……胸ばっかりずっと……っ)
ずっと触られ続けてきすがに私の息も荒くなってしまっている。
「はぁ……う、あ……?」
やっと男の手が止まった。
これで終わりなのだろうか――
そう気を抜いた瞬間……
男が私を羽交い締めにした。
「う……やめ、うく!」
口を布で塞がれる。
「は、はなし……はぁ、う……!」
息を吸い込んだ瞬間に、頭の奥がどんよりと重くなる。
(しまった……この布、麻酔薬が……)
「はぁ、あう……く、はぁ、ふぁ――」
四肢からどんどん力が抜けていく。
『やっぱり胸だけじゃガマンできねぇ。
こんなイイ体をほっとくわけにはいかねぇな』
男の下卑た表情と笑い声が、
暗くなっていく意識のなかでぐわんぐわんとこだまする。
「く……う!」
ダメだ。
もう全く力が入らない……。

どんよりとして暗い意識のなかに、突然眩い光があらわれる。
「う……」
目を開けてみると、すぐ眼前にライトが光っている。
状況がわからない。激しい頭痛。
『へへへ…ホントにイイ体してるよな…アンタは…』
「……っ！」
情報屋の男の顔を見て、とっさに暴れようとしたが無駄だった。
（拘束されてる！？）
私の四肢は拷問イスのようなものに完全に拘束されてしまっている。
「く……う……！」
渾身の力をこめても無駄だった。
それだけしっかりとした拘束具なのか、
それともさっきの麻酔が効いているのか――。
『さてと……生乳を拝ませてもらうか』
私の様子を見て男は勝ち誇った表情になった。
つぶやきながら眼に手をかける。
「いや……っ！」
男が遠慮なく眼をずりあげて、私の胸があらわになった。
『下着なしでこの形……最高じゃねえか！』
「やめて！　やめなさいよ、このおっ！」
必死に抵抗してもたいしたことはできない。
男が胸に触れてくるのを見ているしかなかった。
『ま…待って！こんなの約束が違う！胸を揉むだけだって…！』
今更そんなこと言っても無駄なのはわかってる。
でも、言わずにはいられない。
『分かってるよ…それはそれ…約束どおり情報は後で教えてやるよ。』
『ただ　ここから先はオレの単なる趣味だ。
もちろんアンタがつきあう必要はない。
イヤなら全力で抵抗してもいいんだぜ？』
言いながら、男が私の胸の先端を口に含む。
生暖かく湿った気持ち悪い感触に包まれている。

「う……あ、はぁ、いや、ああっ!」
私は今度こそ全身全霊の力をこめて抵抗する。
「く、ああ、はぁ、うぅ ん、はぁ、うぅ!……ッ!!」
だけどとれだけ頑張っても拘束具はビクともしない。
『アンタの抵抗はそんなものなのかい?』
じゃあ、オレはオレで好きなようにさせてもらうぜ』
「いや、ああっ、やめ……ああっ!」
男が私の後ろにまわり、下着のなかにまで手を入れてくる。
『意外だな。くっしょり濡れてやがる』
男が私にささやく。
生臭い息が耳朶にかかった。
嫌で嫌でたまらない。男の言葉だってきっと嘘だ。
なのにどうしてこんなに――。
『これでもオレはけっこうテクニックには自信があってな。
アンタもすぐにイカせてやるよ。なに、遠慮することねえ』
「や、あ、はぁ……く、うぅん!」
男の指の動きが急に激しくなった。
中指が人差し指……よくわからないけれど、
手を素早く上下に動かしながら、指をこすりつけてくる。
(そこは……!)
男はすぐに私の一番敏感な場所――
クリトリスを探り当てて、そこを集中的に刺激する。
「あ、はぁ、ああう、いや……いやぁ!」
(こんなやつの指で……!)
気持ちよくなりたいわけじゃないし、
本当に心地良い感じではないと思う。
でも、クリトリスばかり刺激されると
強制的にカラダが高ぶってしまう――。
「やめ、あ、はぁ……ん、あぁ……っ! ああ、くううん!」
頭のなかにぱっと白い光が散った。
「あ――はぁ、はう、はぁ……」
(イカされた……)
軽い絶頂。ただカラダの反応だけの、心を伴わないもの。
『良かっただろ?』
「く……ッ」
男のしたり顔が屈辱だった。

『いつまでそんな生意気なカオをしてられるかな？』
男が楽しげにつぶやいて、私を縛り付けているイスの背を押した。
「きゃ！？」
背もたれが倒れてベッドみたいな形になる。
「な、何なの、これ！？」
『おとなしくしてな』
「ひ！？」
男は自分の下半身を露出させていた。
「いや……やめてぇ！」
私の腰を両手でがっしりとつかんで、
股間に隆起したペニスをあてがう。
「いや……いや、やぁ！」
私は必死に暴れて男を遠ざけようとする。
でも全部無駄だった。
拘束された身体はわずかに横に揺れるだけで、
男が腰を押し付けてくるのを拒むことなんてできない。
『諦めはいまいちだが……まあいけるだろう』
「く、あ、いや……あ、痛ッ、あああああっ！！」
股間が裂けるような痛み。
「ひ、い……あ、はぁ、あああうう、くううん！」
『なんだ？　処女か？』
「あぅう、く、はぁ、ああッ！！」
『そんなデカパイして処女とはな。これは儲けたぜ』
「うう、はぁ、あぅ……ッ」
男は興奮しながら無理矢理腰を前に突き出す。
（う……私、け、汚されてる……）
頭のなかでメリメリという悲惨な音が鳴る。
熱くて固い棒が、自分のなかを突き進んでくるのがわかった。
『さすが処女はしまりが違うぜ』
「うぁ……はぁ、やく、そく……っ」
『約束？　ああ、そんなものもあったな』
男は軽蔑な笑いを浮かべ、私の胸をわしづかみにした。
（最低……こんなやつにだまされるなんて……！）

「く、はぁ、ああぁう、っ、んぅ……あぅ！」
男の動きは自分勝手で乱暴なものだった。
ガッガッと力任せに腰を動かして、私のなかを蹂躙していく。
「いや、あ、はぁ……く、んぅ！」
『おお、締まる締まる』
抵抗しようと力をこめれば、それが男を喜ばせてしまう。
私は悔しさに歯噛みしながら男を睨みつける。
『いいねぇ……その表情。ソクソクするぜ』
「はぁ、く、はぁあんん！」
たけどそれも男を喜ばせてしまうだけだった。
何をどうしても男の優位はかわらない――。
男が腰を動かしながら胸を何度も何度ももみしだく。
おまけに人差し指で乳首をいじってくる。
そのたびにビリビリと痺れるような感覚が頭のなかに広がった。
『この巨乳にこの締まり……たまらねぇな』
男の額に汗が浮かび、ストロークが段々早くなってきた。
私は嫌な予感に身震いする。
「そ、外に……外に出してよ！」
『それはできない相談だな』
「な……！？　何考えてるの！？　いや、絶対いや！」
『イヤと言われれば余計にしたくなってきたぜ』
「やめて！　ま、待って！」
男がいよいよ私の腰を強く掴む。
分厚い手で腰骨をがっちりと抑えられ、
おまけに私の最奥まで激しく突いてくるようになった。
「いや、あぅ、はぁ、ああ……！　だ、め……だめ、だめぇ！」
息もできないほどに強く突き込まれる。
「あ、は、ぁ……い、や、やめ……！　なか、だめぇ！」
「う……おおっ！」
「あ、はぁ、あ――あぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！」
私のなかで、男のものが更に大きく膨らんだ気がした。
（熱……ッ！）
同時に胎内に熱くてドロドロしたものが弾ける。
「ひぅ……く、はぁ、ああ、あぁ……」
ペニスがびくんと跳ねるごとに、どんどん熱い塊が流れこんできた。
『ふぅ……』
男が満足気に息を吐く。
相変わらず私の腰をがっしりと掴んで離さないまま――。

END

「も…もういいでしょ！早く情報の続きを！」
思っていた以上に大きな声が出て、男は少し驚いたみたいだ。
『わ…分かった分かった！約束は約束だからな…』
男があたりを気にしながらやっと口を開く。
"エクシライズ"
飲めば瞬死状態の人間でさえ覚醒させてしまうほどの効果があるらしい。
医薬品なのだが副作用も大きくまだ正式な許可は出ていない。
今のところ、医療関係者から流出したエクシライズは
"快楽目的のパーティ"などで使われているとのこと。
『オレが知ってるのはこれくらいだが……
もう少しその胸を触らせてくれるってんなら追加の情報を……』
「もう十分触ったでしょ？」
もったいぶる男の目前で、笑顔で手刀を切る。
「教えてくれる？」
男は引きつった愛想笑いを浮かべ、残りの情報を吐き出す。
こうして私は"エクシライズ"が使われるらしい
パーティの紹介状を手に入れた……。

スラムの一角、路地裏にある怪しい建物。
どうやらあそこがパーティ会場で間違いないらしい。
『あなたもパーティーに？』
受付らしき女が私を見つけて話しかけてきた。
「え…ええ…」
少し気圧されながら頷く。
『そう　あなたみたいなかわいい女のコは大歓迎よ』
女は妖艶に笑い、私の腰に手をかけた。
『でもまず検査しないとね』
「け…検査…？」
『ここはいろんな人たちが交わる場所だから
病気とか持ってるとタイヘンなことになるでしょう？
だからあなたのカラダをすみずみまで検査する必要があるの。
分かるでしょう？』
女が私に触れる手つきは独特で、なんだか背筋がぞくぞくしてしまう。
（やっぱりこのパーティはそういう目的のパーティなのね……）
うまく溶け込めるかどうか、不安が募る。
『さあ、こっちよ』
「……わ…分かったわ…」

カラダの
すみずみまで
検査するからね

……!!

ちょっと
おとなしく
しててね

クリ クリ

風呂場のような場所に連れていかれて、
女に指示されるがままに服を脱いだ。
（さすがに少し抵抗があるわね……）
だけどいつまでも嫌がっていても仕方ないし、
かえって怪しまれてしまうだけのはず。
「ひゃ！？」
『あら、冷たかったかしら。少し我慢してね』
女にローションのようなものを垂らされるけれど、
私は従順に従った。
『まずはカラダを清潔にしないとね』
何かハーブでもすりこまれているのだろうか。
ローションを塗られた場所が少しひんやりする。
ついで、微妙に熱い感覚。湿布を貼ったときに少し似ている。
「あ……は、う……」
女の指が繊細に動いて、ローションを塗りこんでいく。
いくら同性が相手といえどさすがに恥ずかしい。
「んっ！　あ……シ、ごめんなさい」
胸の先端に指が触れ、思わず変な声を出してしまった。
女がかすかに笑う。そして更に優しく私の身体に触れてきた。
「う……ん、はぁ……あ……」
こうして裸を晒していることも恥ずかしいけれど
、何より声が出てしまうことが恥ずかしかった。
（でも……これも、エクシライズ、を
手に入れるためなんだから、ガマンしなきゃ……）

「ん……う、あ、はぅ……く」
いったいいつまでこの行為が続くんだろう。
いつの間にか女ももう一人増え、
あわせて四本の手が私の身体に触れている。
「あ、ん……！」
ひとりの手が私の胸に触れた。
弾力を確かめるみたいに、上下に胸を揺する。
「あの……そこは……」
『ふふふ……面、ガマンしなくてもいいのよ』
「え？」
女の指がさっと動いて、乳首のまわりをひっかいた。
「ひぁあ！」
『いい声ね……。あなた、本当にかわいいわ』
それを境に女たちの手の動きが変化した。
さっきまでは"洗う"という感じもあったけれど、
今はもう完全に私の身体をもてあそんでいる。
「や、やめてください……あ、はぁ！」
『まだよ…まだ検査は全然終わってないわ』
「やぁ、く……はぅ……！」
女の指が動き、胸を刺激してくる。
その手を払いのけようとすると、
もうひとりの女が私の手を押えつけた。
「あ、はぅ、んん……！　くぅ！」
私の心のなかで、拒絶と戸惑いが交差する。
逃げ出すこともできるけれど、
そうすれば"エクシライズ"の情報は手に入らなくなる……。
そんな誘惑を女たちは巧みについてくる。
まるで私の身体を屈服させる方法を知っているみたいに。
「ん、はぁ、う……ん、うぅ……っ！」
女たちの手が触れている時間が長くなればなるほど、
神経を直接操られてしまうかのようだった。
身体が跳ねあがり、自然と声が漏れてしまう。

『じゃあ次はココの検査をするわね』
「やっ！」
いつの間にか恥ずかしい格好をとらされていた私は、思わず大きな声をあげた。
『ココを触ると『あっ！』って声が出るかしらね』
クイッ
「あっ！」
女の指は私の敏感なところを何の躊躇もなしに触る。
『フフフ…いい反応… ココの機能は問題なさそうね』
「や、やめてください！」
『何を言ってるの。
これもパーティに参加するためには必要な調査なんだから』
笑いながら言うそのセリフは、どこまで本気なのかどうかわからない。
ただ、二人の女が今、明らかに楽しんでいるということはなんとなくわかった。
『ほら、もっといじってあげるわ』
「いや、やぁ……ぁ、はぁ、ああぅん！」
二人は遠慮無く私のアソコと胸を触る。
敏感な場所を直接さわられて、徐々に私の意識は遠く、他人のもののようになってしまう。
「ぁ……はぁ、ん……う、ぁ、やぁ……っ」
そろそろまずい。
本当に、逃げてしまったほうがいい――。
本能的にはわかっているけれど、身体はなかなか動いてくれない。
「い……やぁ、はぁ、ううん！」
私がおとなしくしていると女たちはどんどん調子に乗って、私の下半身を好きなようにいじる。
「や、あ、はぅ……ん、はぁ、ああ……！」
アソコを指で徹底的にいじられる。
もう声をガマンすることなんてできない。
私は必死に快感を押し殺しながら、
女たちの愛撫にひたすら耐えた……。

●本気で抵抗する→ 18
●まだガマンする→ 13

「あっ……ひ、う、……く、あう……」
女たちにされるがままに、私は四つん這いの姿勢をとらされる。
前から後ろから手がのびて、
細い指先でカラダのあちこちを愛撫された。
同性の細い指の動きは心の隙間に入り込んでくるかのようで、
抗うことが難しい。
『あらっ♡あなた処女なのね……
処女なのにこんなところに来て…ホントにいやらしいコなのね』
「ち、ちが……あ、う……うあ！」
股間に熱い感触。
「ひ、あ、はぁ……！　な、なにを……あ、やあ！」
見ると、女が私の股間に顔を埋めて舐みたいに舌を動かしている。
「そ、そんなところ……なめたら……
あ、やあ、きたな、ん、はぁ、あぁう！」
『ふふふ。汚くなんてないわ。
それよりもっとその声を聞かせてちょうだいね』
「あ――はぁ、ぁあぁん！」
指と舌が同時に動いて、二箇所を刺激してくる。
（え……あ、アソコと、お尻……お尻を、なめられてるの！？）
女のしていることが信じられない。
そんな場所を舌で直接なめるなんて――。
「あう……ひ、はぁ、あぁ、いやぁ……ん、はぁあ！」
だけど、もっと信じられないのは自分自身だった。
私はお尻の穴を同性になめられて気持ちよくなってしまっている。
女の舌が動くたびに、頭のなかでぱちぱちと火花が散る。
（こ、こんなの……おかしくなっちゃう！）
このまま女たちのされるがままにしていると、
自分が取り返しのつかない場所まで行ってしまう気がする――。
そんな想いから、私は意を決して二人の女を跳ね除けようとした。
「ふ……あ、ひ！？　ふぁ、んはぁあ！」
だけど身体を動かそうとした瞬間に、
アソコとお尻に何か熱いものを注がれた。

「あ、ひ……？　う、ああ……」
（何……何されたの！？）
『今　抵抗しようとしてたでしょ？』
「あ、はぁ、うぅ……」
全身が急速に熱くなってきて、力が入らない。
なのに感覚だけは鋭敏になっているような――。
（まさか――媚薬！？）
脱力した私が女たちを見上げると、
二人は意味ありげな笑みを浮かべた。
『ダメよ　抵抗しちゃ…　悪いコね…　縛っちゃうわよ』
「あ、やぁ、う……はぁ……っ」
身体が熱い。頭の芯にもぼうっと熱がこもって何も考えられない。
手足をタオルで縛ってくる女たちに全く抵抗できないでいた。
「やめ、て……はなして、ぁ、んぅ！」
私を拘束してから、女たちが再び愛撫を開始する。
「あぁ、やぁ！　胸、ぁ、はぅう……ん、くぅ！」
ヌルヌルのローションの滑りが、
女の指と私の身体の境界線をなくしてしまう。
細い指先が身体のなかを直接荒らしていくような倒錯的な感覚――。
「くふぁ、はぁ、はぅ……ん、んぅうう！」
更に股間にも舌のぬめった感覚。
「いや……ぁ、はぁあぁ、くぅん！」
少しざらついた独特の舌の感触が、
股間の下のほうからだんだん上へ上へとのぼってくる。
「は、ひぅん！　んぁ、はぁ、はぅ……！」
アソコのまわりを這い回った舌が生暖かい感触を残す。
（こんなの、つらすぎる……！）
たまらなくなって、また何とか抵抗しようとする。
「あぅ……く、はぁ、うぅ！」
だけど相変わらず力は入らず、身体を揺することすらできなかった。
（こんなの、普段ならなんてことないのに……！）

ほら
イッちゃいなさい
千羽ちゃんっ
ビクッ
ビクッ
ビクッ

「あ、あ、は――う、ああぁ、う……ふあぁあん！」
お腹の奥にぽっと火がともった。
私の身体は素直に反応し、心とは関係なく高まっていく。
（いや……いやなのに……！）
「あひ、ひぅ……ん、う、ぁ――はぁ、やぁあっ、あ、ああ！！」
ビクビクと腰が大きく跳ね、
快感の津波が頭のなかにある理性を全部まっさらにする――。
女たちの手によって私は簡単に絶頂に達してしまった。
「ああ……はぁ、ああぅ……ん、はぁ、あ、はぁ……」
クスリのせいもあるんだろうか。
快感の波はずっと引かず、私のお腹のおくにわだかまり続ける。
「う、あ……」
もう私は逃って逃げることすらできなくなっていた。
『このまま変態男の餌食になっちゃうなんて勿体ないわね』
『つまみ食いしちゃおっかな』
「え……あ……」
女たちの会話は聞こえてくる。だけど内容はぜんぜん頭に入らない。
『実は処女を散らすのって初めて。興奮するわぁ』
言いながら、女が何か器具のようなものを腰につける。
（え……あの形って……）
『いくわよ……』
戸惑っている間に、女が私の股を開かせ、腰をつかむ。
「いや、あ……っ、やぁ、ああぁぁぁっ！」
股間に火が灯ったような感覚。
太いものがずぶずぶと、痛みを伴いながら私のなかに侵入してくる。
「はぁ、あ……あぅ、んんぅ！」
けれどその痛みはすぐに熱くうずくような快楽に変わる。
女が腰をゆするたびに頭のなかで光が弾ける。
『さすが媚薬の効果はすごいわね。初めてでも感じるでしょう？』
女は笑い、私の身体を抑えつける。
「ああぁ、やぁ、あぁ……ん、はぁ！」
私は身動きできず、女の律動を受け容れるほかなかった。
ローションのぬめりが滑りを良くしていて、
少々乱暴なことをされても全く痛みはない。
……媚薬の効果もあるのかもしれない。
「あぁ、はぁぁぁ、いや、あぁあっ！」
女の脚で押さえつけられた手は徐々にしびれてきて、感覚が遠のく。
（全身の感覚はないのに……アソコだけ、すごい……！）
私は自分の体のなかに侵入してくる異物の存在だけを強く感じた。
固い芯が、ゆっくりと進んで私の奥の奥にまで到達する――。

『あなた、きっと名器ね。こんなにも押し返してきて……すごく締まってる。耐えてるからかしら？』
女が声を上ずらせ、舌なめずりして腰を動かし始める。
男の人のものを模したそれが抜き挿しされるのは
たまらなく気持ち悪かった。
不自然な固さが私のなかをこじ開け、粗暴に暴れる。
だけど――その不快感が頭の奥を痺れさせてくる。
「くぅ、うぅ、はぁ、あ……ひ、ああ、や……」
『ああ、その表情、最高ね。いいのよ……受け容れてしまいなさい！』
「ひぁ、ああ、んんぁっ！」
女が私の足首を掴んで、強く引っ張る。
そして――コツコツと一点を集中して突いてきた。
「あ、ひ、ああ、うん！」
『やっぱり。ここ、弱いのね？』
「い……やぁ、ああ、はぅん、んんっ！」
女がそこをつきはじめた途端に、何が何だかわからなくなった。
下腹の奥が熱くなって、急速に何かがせりあがってくる。
『緊張しないで、リラックスして――』
もう一人の女が言って、ぬるぬるの全身を使って私を愛撫する。
「ん、はぁ、あぅ……く、はぁ、あ……」
二人の女と私が混ざり合ってしまうような奇妙な感覚。
あたたかさとぬめりで、肌の境目があいまいになって――。
「あ、ああ、あ――」
なかに入れられた偽のペニスを通して私たちは繋がっている――。
「あ……ひ、ああっ、や、ああ、うぁ……あ、はっぁぁあん！！」
その瞬間にお腹の奥から快感が爆発した。
「ひぅ……ふぅ、あああ、いい、きもちい……ああ、ああっ！」
『あはは！　すごい、潮ふいてるわ！』
『ほんと。初めてなのにこんなにして……』
「う……あ、え……あ、はぁ……」
私は自分でも信じられないくらい泣きしながら、
今まで味わったことのない絶頂に達していた……。
『やっぱり、この子は私たちで飼いましょう？』
『そうね。男に変なこと仕込まれる前に、
徹底的に女の快楽で調教してあげたいわ』
女たちの会話が徐々に遠ざかる。
これからどうなってしまうんだろう……
絶望と同時に甘い期待も感じながら、私の意識は闇に落ちた。

END

女の指がアソコから移動して、お尻の穴に近づく。

「い…いやっ！」

急速に湧き上がった嫌悪感のまま、私は反射的に暴れた。

本能で繰り出した回し蹴りが、女の顔を叩いてしまう直前に止める。

『ご、ごめんなさい』

女たちは呆れ顔で仲間と顔を見合わせる。

『わ…わかったわ…検査はOKよ…フフフ…』

『さあ会場にどうぞ　楽しんできてね』

案内され、奥にある広間の扉を開けた。

コンサートホール程度の大きさの広間で、大量の男女が乱交している。

（これが秘密のパーティっていうわけね……）

奇声や歓声をあげ、酒とたばこを手にしながら交わっている男女。

私の常識では考えられない光景だった。

（でも……なんとかエクシライズの情報を手に入れなきゃ）

私は意を決して広間に足を踏み入れた。

辺りを見回すと、用意されているテーブルの上には酒のほかに、小瓶に入ったクスリがいくつか置かれている。

（それっぽいものはあちこちにあるみたいね……）

だけど、どれが。エクシライズ。なのかはわかりそうになかった。

（どうしよう……）

『おやぁ？キミ…見かけないコだね…新人かな？』

『いいカラダしてるねぇ～…オレたちが遊んであげようか？』

やはり一人でいるのは目立つのだろうか。

典型的なエロ親父といった風体の中年男が私に声をかけてきた。

「あ、あの、すみませ……」

『なんだ、ツレないねぇ。俺たちじゃ不満か？』

「えっと、その……」

私たち三人を、周囲のカップル達が興味深そうに見ている。

（目立ちすぎるわけにはいかない……）

そういうパーティなんだし、ある程度は仕方ないわね……）

「あ、いや、やめてください」

セリフではそう言いながら、無理に笑顔を作って男の顔を見る。

『お、いいねぇ～。ウブっぽい感じもちょうと欲しかったんだ』

男はティファの意図を察し、嬉しそうに胸に触れてくる。

（うう、イヤだけど……。）

適当にそれっぽいフリをしながら情報を集めないと……）

私はこわばる身体からなんとか力を抜いて男に身を預けた。

男二人が私の身体を押え、愛撫してくる。
(まずい……動けない……)
もしかするとこの男たちには格闘技の経験があるのかもしれない。
痛くはないけれど、自然に筋肉に力が入らない形にもっていかれてしまった。
「あ、やぁ！」
焦る私に追い打ちをかけるように二人の指の動きが本格的になる。
「ん、ふ……ぁ、んんん……っ！」
一人が胸を触り、集中的に乳首を愛撫してくる。
(いきなりそんなところ、触らないでよ……！)
もう一人は腿や脚に舌を這わせた。
「あ、う……え、やぁ、ああ、ああっ！」
(なに……どうして、急にこんなに気持ちよく——)
「あはぁん！」
肌の表面にぴりぴりとひきつるような感覚があった。
少し痛く感じるくらいだが、
温かがそこに触れると痛みはひいてじんわりとした心地良さに変わる。
(まさか……さっき消毒とかいって塗られたローションのせい……？)
「あ、やぁ、はぅん！　いや、ま、待って……ん、はぁん！」
普段の倍くらい敏感になってしまっている。
男の舌や指が肌の上を這うだけで激しい電流が背筋を登っていく。
「う……ぁ、はぁ、あ、あぅ……っ！」
(ガマンしなきゃ……情報を聞き出すまでは、冷静に……)
「く、うぅ……はぁ、あ……」
そう思っていても、身体はどんどん高ぶり
頭の芯にぼんやりともやがかかったようになる。
「ネエちゃん　名前は何ていうの？」
「えっ…あ…ティファです…はうっ！」
「ティファちゃんか……かわいい名前だね」
(しまった…つい本名を…！)
「ティファちゃんはどこが一番感じるの？フフフ」

「あ、はぁ、うう……んぁあ！」
肌の感覚……特に胸のあたりがすごく敏感になっている。
「やぁ、ぅ……胸は、あ、はぁ……、んん……っ」
男たちはすぐにそれを見ぬいて、胸ばかりを集中的に攻めてきた。
『ティファちゃんは胸がいいんだね』
『こんなに大きくて形もよくて、しかも感度までいいなんてすごいな』
「ち、ちがうんです……ぁ、普段は、こんな……うう、はぁ、ああうん！」
『ん？　それは俺たちが普段よりもずっと感じさせてくれるテクニシャンだってこと？　うれしいねぇ～』
（違う、これは……クスリのせいなのに……！）
私が何を言っても男たちには通じないだろう。
それなら何も言わずにガマンすることに徹したほうがいい。
そう思っていても――
「ひゃ、はぅ……ん、ぅ、くぅ……っ」
――敏感になった身体はどうしようもなく男の指に反応してしまう。
『これを使ってみたらどうなるかな？』
ウィーン……という妙な音。
見ると、男の手にはマッサージ器が握られていた。
「あ、やぁ、だめ……いやぁ、ああぁぁあっ！」
『お、良い反応』
「ひっ、はぁ、ああ……それ、だめ……！」
ぶるぶるって、揺れて……あ、やぁ、離し、て……ぁ、はぁああ！」
敏感になっているところにその細かな振動はまるで拷問だった。
「ああ、ああ　……ぅ、はぁ、ああ……」
何も考えられなくなるくらい激しい快感が頭を冒していく。

『ティファちゃん、ちょっと感じすぎだよ』
「いや、ああ……！」
男たちは笑いながら言って、私を押さえこむ。
『おっと、逃れない逃れない』
楽しそうな男たちとは対照的に、私は必死だった。
もうこれ以上、あの振動マッサージ器を味わいたくない――。
「待って！　もう、ほんとに嫌なの！」
ウィーン……。男たちは非情だった。
振動音がどんどん近づいてくる。
「あ、ひ……あぁぁぁ、いやぁぁぁぁぁっ！！」
股間にあの振動が触れた。
「いやぁ！　あぁぁ、あぁっひ……！　うぁ、あぁっぅ！」
全身が跳ね上がる。
だけど男たちが圧倒的な力でおさえこんできて、
私の身体はほとんど動かない。
動いて快感を逃すこともできず、
私は振動の快楽をどんどん味わわされる。
「いやぁ、ああ、はぁ……っ」
『はは、すごい感じ方だね！』
数秒経ってやっと男がマッサージ器を離してくれた。
「あ――は、うぅ……」
（今……私、一瞬でイキそうに……）
自分でも信じられない。
火照り、敏感になっている自分の身体が怖かった。

●本気で抵抗する　→　28
●まだガマンする　→　22

（早く情報を聞き出さないと……）
このままじゃ私、どうにかなっちゃう……）
本当はもっと慎重に行こうと思ってたんだけど仕方ない。
「ま…待って！エクシライズ……！
エクシライズっていうクスリ、知ってる！？」
私は精一杯男たちに媚びる目線を送りながら、単刀直入に聞いた。
『何だ？ティファちゃんはおクスリに興味があるのか？』
『いいよ～　ものすごく気持ちがよくなるクスリをあげるよ～』
「本当！？」
『そのかわり……そうだな、　口でしてもらおうかな』
「え……」
男が自らの股を突き出し、大きくなったモノを私の顔に近づける。
『あれ？　イヤなの？　じゃあクスリはあげられないなぁ』
「……ッ……こ……こう？」
『そうそう、そのまま唇を閉じて……。おっと、歯は立てないでくれよ』
私は結局男に従って、醜悪なそれを口に含んだ。
（うう……きもちわるい！　でも、これをガマンすればエクシライズが……）
吐きそうになるけれど、必死に耐えながら男の言う通りにする。
「ん、じゅ、んちゅ……ふう、じゅず、ずぞぞ！」
（すごいにおい……）
強く吸い込めば、それだけ空気が鼻に抜ける。
オスのにおいがいっぱいに広がって頭がおかしくなってしまいそうだった。
『ん～ちょっと物足りないな。あんましたことないの？
それじゃクスリはあげられないよ』
「う……んちゅ、ちゅぶ、ちゅ……じゅぶ、じゅぼ！」
『そうそう、良いねぇ。ちゃんとやればご褒美をあげるからね』
こんな場所でこんなことをしている自分が情けない。
でも今は男の言うことに従うほかなかった。
『もっと舌動かして……カリのところに這わせて。唇ももっと使って……』
『ティファちゃん、取り込み中悪いけどちょっと力抜いてね』
「……？」
もうひとりの男が後ろで何かしている。
「ん……あ、ふはぁん！」
（冷た……！）
「な、なにしたの……！？」
『可愛いお尻の穴にクスリをいれてあげたんだよ。欲しがってただろ？』
「欲しがってなんか……あ、ああぁっ！」
即効性のあるクスリなのだろうか。
入れられた直後は冷たかったのに、
もう下半身がじわじわと熱を持ち始めている。

「あ……はぁ、うう……」
身体がどんどん熱くなってくるのがわかる。
血管がどくどくと激しく鳴る音が聞こえる。
まるでずっと全力疾走してるみたいだった。
「こ……これがエクシライズ……なの……！？」
「まさか……そんな高価なクスリをオレたちが持ってるわけないよ」
「アレは相当　貴重なモンだからな……
VIPルームの奴らくらいじゃないと持ってないだろ」
「そ……そんなッ！」
「コレでも十分キモチイイだろ？なあ？」
（エクシライズは、ないい……！）
それならもうこんな男たちの相手をする必要なんてない。
「わ、私！もう……！」
「おっと逃げるなよ。エクシライズほどじゃないが、
さっきのクスリだってけっこう高いんだよ。
一緒に楽しんでってくれよ」
「い、いや……離し、ふぇ……あ、はぁ……！」
膝がガクガクし、高熱が出たときのように目眩がする。
「あ、はぁ、ああぁ、うう……」
「だいぶ効いてきたみたいだね」
くるくると世界がまわる。力が入らない。
その崩壊感覚だけは鋭敏で、
身体の芯が途方もなく熱く……渇きを覚える。
「ひぁあああっ！」
男が胸に触れると、それだけで大声を出してしまった。
でも自分の声じゃないみたいに、
どこか遠くから聞こえてくるような気もする――。
（いけない……このクスリ、効きすぎてる！）

逃げなきゃ――。
本能的に思い、男の手を振りほどこうとする。
「いや……ぁ、はぁ……っ」
だけど、私の手はふらふらと男の手にすがりついただけだった。
クスリが神経を完全に支配している。
「やめて……もう、いやなの……」
こんなの、私……ほんとは、ぁ、はぁ……!」
『ははは、嘘ばっかり言って。
ティファちゃんのここ、ぐしょぐしょになってるよ』
「そんな……ち、ちが……ふぁ、はぁ!」
あたたかくてぬめった感覚が突如股間にあらわれた。
(アソコを……なめられてる……!)
『すごい、本気汁でてるよ。ちょっとクスリの量が多かったかな?』
「いやぁ、ああ、だめぇ! そんなところ……
きたな、ぁ、はぁ、はなして、はなしてぇ!」
精一杯抵抗しようとしてるのに、
私を押さえこむ男の腕は微動だにしてくれなかった。
『ほんとは気持ちいいんでしょ?』
「ちが……ぁ、はぁ、ちがうっ!」
『強情だなぁ、ぁ、そうか。
これは無理矢理されちゃうってプレイだったね。ごめんごめん』
(違うのに……!)
もう何を言っても男は離してくれそうになかった。
『もっと気持ちよくさせてあげるからね』
「ぁぁ、うぅ、ん……く、はぁん!」
男が股間に顔を近づけると、生あたたかい息が吹きかかる。
それだけでも、私はおかしくなってしまいそうなくらい感じていた。
「やぁ、ぁぁ、はぁ、ん……うぁぁん!」
実際に舌が触れ、背筋を電流が貫く。
「はぁ、ぁ、や、は……ぁぁぁぁ、ぁぁ、ふぁぁぁぁ!!」
クリトリスを舐められ、私はすぐに軽い絶頂に達してしまった――。

『じゃ、そろそろ本番といきますか』
「うぁ……?」
股間に熱くて固いものが当たる。
「え……?」
『これならもう入るな』
「あ、あああ――いや、いや、あああぁぁん!」
私の身体の中心を何かが一気に貫いた。
『うほ、すげえ良い締まり』
「いや、やめ……やぁ、抜い、て……! あ、はぁ、ううん!」
男が私の腰をつかんで大きく股を開かせる。
そしてガツガツと激しく私の奥を突いた。
「や、ぁ、ああっ、いやああん!」
信じられないけど――すごく気持ちいい。
「だめ、だめだめだめぇ!
私、こんなのもたな……ぁ、はぁ、ああっ!」
『遠慮なく気持ちよくなっていいんだよ』
「いや、いやなの……ぁ、はぁ!」
(逃げ……なきゃ、逃げなきゃ、いけないのに……!)
男が腰を動かすたびに
身体が浮き上がるような恍惚感がもたらされる。
ふわふわとした現実感のない感覚。
「あ、う……ぁあ……」
指に力を入れても、拳を握ることすらできなかった。
『くう、ほんとすごい締まりだよ。
やっぱ若くてほどよく筋肉もついてる子のマンコは最高だね』
「やぁ、ああ……ふぁ、はぁ、んぅ……ああっ!」
あまりの快感に神経がオーバーヒートしている。
「く、うう……ふぁ、ああ、ひ、あ、あ、あ、あ、あ、あ……!」
(ダメ、イキそ……イク、あ、あ、ああ……!)
『うお……イキそうになったらまだ締まるんだな。
ほんと最高だよ。いいよ、見ててあげるからイキな』
「あ、はぁ、はぅ……ん、くう、イ……く、
イク、イクイクイクゥウウウ!」
意識が飛びそうになるくらい強烈な絶頂――

「う……ん、はぁ、ああ……ひ、ううん、ふあ……！」
もう時間の感覚がない。
さっきから入れ替わり立ち代り、別の男の相手をさせられているみたいだった。
「あ、はぁ、う……ん、はぁ……！」
朦朧とした意識。もう相手の男の顔がぼやけて見えない。
（あ……さっきの人より、大きい……）
もうそんな恥ずかしい感覚と本能しか残っていなかった。
『おお、すげえマ○コだな……。人気なだけあるね』
「あぁ、ん、ふぁ、いや、やぁ……っ」
脱力した私を、男がどんどん下から突き上げてくる。
胸もぼみしだかれてまた新たな絶頂の予感が迫ってきた。
（さっきから……何回イッてるんだろう……）
『うお……どこに出して欲しいんだ？　言ってみろ』
「あ……う、あ、はぁ……なかは……もう、いやぁ……」
『へへへ、イヤなら自分で立ってみな』
「それは……ぁ、はぁ、ああっ、む、むりぃ……いや、やぁ、ああ……！」
『じゃあこのままだな』
「いや、いやああっ！　あぁはぁ、うぅ……！」
何人かの男が周りにいて、私を熱っぽい瞳で見つめてくる。
この男が達しても……さっきまでと同じようにまた別の男がきっと私を犯す。
（逃げ……なきゃ……）
でも、自力で立ち上がることもできないのに、どうやって？
『そら、出すぞ！』
「あ、はぁ、いやぁ、ああぁぁあっ！」
身体のなかに熱く粘った液体を注ぎ込まれながら、私は新たな絶頂に打ち震える……。

END

(このままこの男たちにいいようにされたら……)
私は自らの火照った身体を抱きしめながら身震いする。
(イヤ……絶対イヤ!)
自分がどうにかなってしまいそうな恐怖が衝動になって私のなかを駆け抜ける。
『さあ、ティファちゃん、次は何を――』
「触らないで!」
男の手が肌に触れると同時に、私は反射的に手を払っていた。
『くえ!』
『! てめぇ、何しやがんだ!』
周囲がざわつく。
『おい! 警備! この女が――』
「くっ」
こうなったらもう逃げるしかない。
「どいて!」
絡み合う男女を押しのけ、出口に向かって駆ける。
だが――
バスッ!
「あぁっ!」
太股にやけつくような痛みを感じ、私はその場に転んでしまう。
「く、あ……う……」
見ると、小型の注射器のようなものが刺さっていた。
抜こうとするが、すぐに指先がしびれていることに気付く。
(麻酔弾!)
立ち上がろうとするが、太股が痺れて動けない。
「く、あ、う……」
ぞろぞろやってきた警備の男たちが私を取り囲む。同時に麻酔の効果で私の意識は急速に薄くと落ちていった……。

「う、あ……」
視界が白い。
目をあけるとまず強い光が網膜を焼いた。
（なに……？）
数秒経ってようやく目が慣れてくる。
すると――大勢の観客が目に入った。
（見られ……てる……？　どうして、私を……）
『さて、今回の出品物は変り種！
当オークション運営者より、パーティの邪魔をしようとした
じゃじゃ馬娘でございます！』
「！？」
私はやっと事態に気づいた。
「く……！」
椅子に縛られて動けない。
そしてそんな私に当たる強いスポットライト。
観客。司会の口上――。
今、私は商品として売りにかけられているのだった。
『普段なら邪魔者は速やかに排除するところですが、
この娘はなかなかの上物。
見せしめの意味もこめて、
皆さんの手で調教していただこうという、
粋な計らいでございます！』
司会が言うと、会場は一気に盛り上がった。
『さて、この娘を好きにできる権利、
5万ギル、5万ギルからでございます！』
『6万ギル！』
『7万ギル！』
『10万ギル！』

『皆さんありがとうございます！
さっそくお値段もついておりますが、
ここはひとつ、限り落とす前の余興を行いたく思います！』
私を差し置いて、オークションはどんどん進行していく。
『まずは感度チェック！』
司会の男が近づいてきて、私に触れた。
「あ……い、やぁ、んん……！」
そしていきなり胸に触れて、強く揉みしだく。
「やめ……離して、はぁ、う……あ、ああ……！」
まださっきの麻酔薬の効果が残っているのだろうか。
全身は痺れていて、肌の表面がひりひりする。
「あ、はぁ、んん！」
こんな風に触られると、
そのひりひりが増幅されて独特の感覚を産んだ。
「やめ……はぁ、あ、うう……！」
司会の男は私を蔑むような笑みを浮かべ、
舞台の前のほうに椅子ごと突き出す。
「あ――」
スポットライトが更に強く当たる。
同時に、観客の視線も強く刺さった。
（こんな恥ずかしい格好を……見られてる……っ）
椅子に縛えつけられた拘束具で開脚させられている私。
観客の視線は胸と、大きく開いた股間に集中していた。
「いや、ああ……み、見ないで！　あ、はぁ、ううぅん！」
観客に私の姿をたっぷりと見せてから、
司会の男がまた私の胸をもみしだく。
我慢しているのに、ぴりぴりとした肌の感覚が
心地良い刺激になってしまう。
「うあああ、はぁ、んん……くぅ、んんぅ！」
『どうですか皆さん！　この感度の良さ！
制限を加える甲斐もあるというものでしょう！』
司会が言うと観客はどっと笑う。

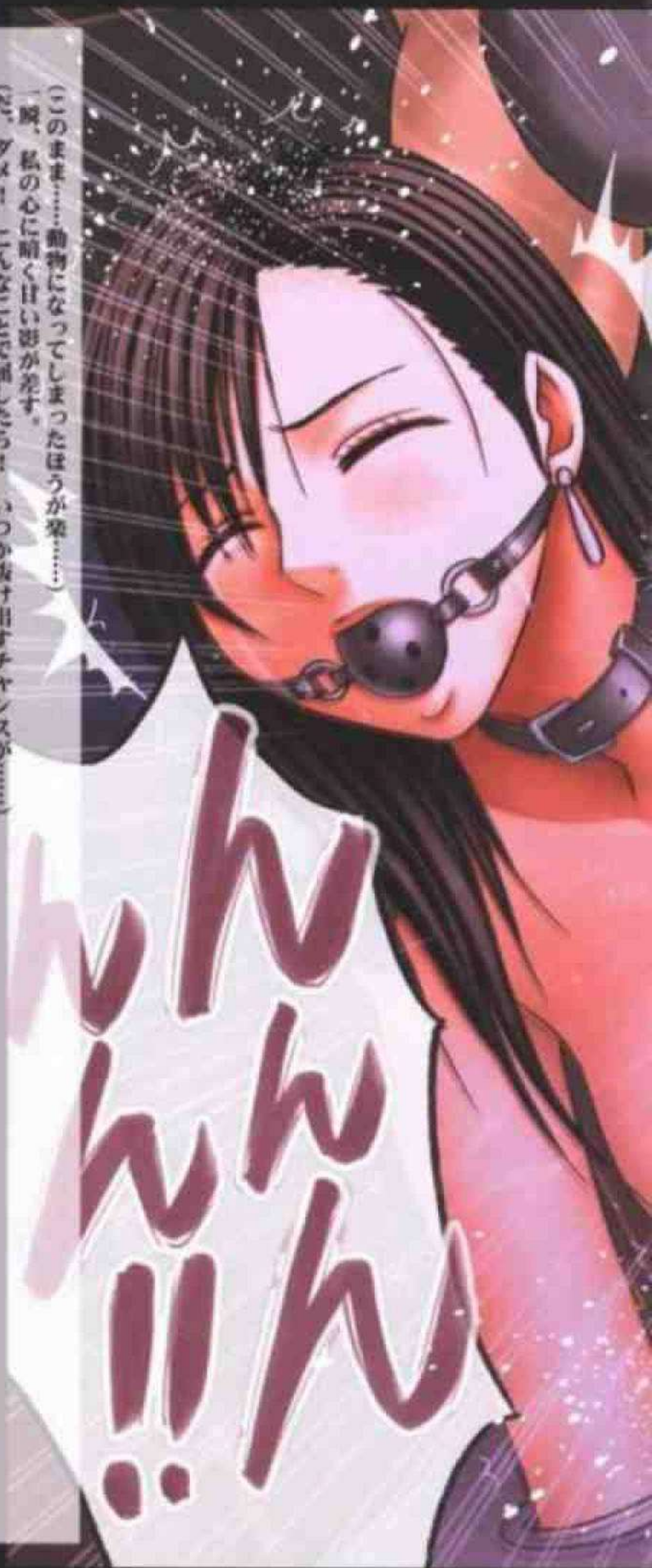
●堕ちたフリをする　↓　31
●ガマンする　↓　36

ダメッ…これは…ガマンできない！
ビクッ
ビクッ
ビクッ

それから数分間。
ずっと機械に突かれ続けて――。
「あ、ひ、ああ、やあ……！」
私はもう限界だった。
司会が何か言っているが、
湧き上がる衝動を抑えるのに精一杯でほとんど何も聞こえない。
（見てる……みんな……！）
好奇の視線も今すぐ泣き出しそうになるくらいイヤだ。
（見ないで……そんな目で私を見ないでよ！）
皆が見ている。私を見下している――。
機械のせいなのに、きっと私のことを
インランだと思っているんだろう。
それが悔しくて、すごく恥ずかしい。
だけどこんな状況で何を言っても無駄なこともわかる。
「あ……ああ、はあ、く……あ、ああっ！」
身体がどんどんのぼりつめていく。
だんだん機械のモーター音しか耳に入らなくなって――。
「うあ……く、は、あ――！」
私は軽く達してしまった。
「う、はあ、く、はあ、はあ――」
たけど、私がどうなろうと当然機械は止まってくれない。
「いや……あ、ああ……」
甲高いモーター音のまま、私のなかをピストンし続ける。
顔をあげると相変わらず観客の視線。
会場は盛り上がっているのか、熱に浸んだ視線で私を見ている――。
「ひ、あ、ああっ、ふぁああっ！」
今度はさっきよりもずっと激しい絶頂だった。
「いやああ、う、あ……はあ、んううう、うう！」
「イクのが……止まらない！」
無理矢理快楽の淵へと押しやられた私の身体は、
機械のピストンによって高ぶったままになる。
「あう、くあ、ふああ！　とめ、て……！」
これ、ほんとに……あ、や、また、イ……あ、あ、んああっ！」
（頭、おかしくなる……！）
意識がちかちかと明滅する。
スイッチが〇〇と〇〇を激しく繰り返すような感覚。
「あ、ひ――ああ、うあ……」
何度も何度も強制的な絶頂を与えられる。
その拷問は私が失神してしまうまで続いた……。

「あ……う……」
目が覚める。
あの強い照明の光はなくなって、薄暗い場所になっていた。
どうやらどこか違う場所に連れてこられて――。
『へへ、目が覚めたか？』
「え、あ……」
ズブ！
「ふあああ！？」
いきなり熱いものを挿入される。
『お？　さっきあんだけマシンに見されてたのに
いい締まり具合じゃないか』
「うぐ、もご、ん……！」
抗議しようとしたけれど、口に何かはめられている。
『高い金払って落札したんだ。たっぷり楽しませてもらうよ！』
「ひっ、あ、あは、あ……！」
重い痺れが残る身体に、男のペニスが勢い良く刺さる。
逃げられるほどの体力はもう残っていない。
なのに、重く頑丈な拘束具に私は完全に囚えられていた。
こんなの……もうどうしようもないじゃない……）
手も脚も全く自由にならない。
『もう少し締めて欲しいな』
「うぐ……！　かはっ、ああっ！」
『おおお、良いね……その調子だ！』
おまけに首輪まではめられている。
男は馬の手綱を扱うかのように、私の首を締め上げた。
「く、はぁ……ああ、う……！
うう、けほっ、う……く、はぁ、ああ、ふああ！」
私が苦しそうにせきこむと男は楽しそうに笑う。
この拘束具の形、この男は私のことを
本当にペットか家畜のように考えているのだろう。
「う……もご、はぁ、うぐ……んぅ！」
男の腰の動きが徐々に激しくなってきた。

「いや……もう、やめふぇ……はう、んん！」
『んッ？　何言ってるのかわからないなぁ』
男はわざとらしい口調で言って、また首輪を引っ張る。
「んぐ、はぁ、うむ……！」
『これからキミはペットになるんだよ。ペットが人の言葉を話せるわけがないだろう？』
「んん！　んんぅ！」
私は精一杯首を振り、抗議の意志を示す。
『こら！　人間に逆らうんじゃない！』
「ふぁ、うく、はぁ……あ、ああっ、ふはああ！」
また首輪を引かれる。完全に動物扱いされている屈辱が私の胸の奥をきゅっと締め付けた。
「う……く、うう……」
『おっと、ごめんごめん。ちょっと乱暴だったね。大丈夫、おとなしくしてれば優しくしてあげるから』
「あ、はぁ、あぅ……っ」
私が気力をなくして無抵抗になると、男は器なで声になった。そして機嫌よく喉を動かし始める。
「あ……ん、はぁ、ああ！　い、ぁ、くぅん！」
『そうそう、ちゃんと締めて……うん、良いね。気持ちいいよ。ずっとこうしてれば乱暴しないからね？』
「うう、う……」



（このまま……動物になってしまったほうが楽……）
一瞬、私の心に暗く甘い影が差す。
（だ、ダメ！　こんなことで屈したら！　いつか抜け出すチャンスが……）
必死にその影を振り払ってできるだけポジティブなことを考える。
『ククク……ほんと、高いお金出した甲斐があったよ。まだそんなカオができるんだね』
「……ッ」
『でも、無駄だよ。一度イカせてあげる。そんな抵抗が無駄だってこと、身体に覚えさせてあげるからね……』
「……あ、やぁ、ああぁっ！」
男の腕の動きが細かく小刻みなものになった。
「ひ！　ぁ、はぁ！　う、ぁ、ぁ、ぁ、やぁ！」
コッコッと一番奥だけを集中的に突かれ、快感が一気に高まっていく。
『ほら、機械なんかより人間のチ○ポのほうがずっといいだろ？』
「あ、はぁ、やぁ！　ん、ぅぁ、は、ああ！」
私の身体がまだ高ぶったままなのだろうか。大きな絶頂の予感が訪れる――。
『そろそろイキそうなんだろ？　いいよ、素直になりなよ』
「う……はぁ、あ、うぐ、んんぅううっ！」
優しい声で言いながら男がまた首輪を引いた。
敏感――目の前が暗くなって、お腹の奥を突かれる感覚だけが強く、大きくなる。
「う、かは、は――あぐ、ん、ぁあ、あああああああっ！！」
男にされるがまま、私はイッてしまった……。

END

司会の口上も観客の視線も、何もかも扇情的だった。
（でも――考えようによっては、これはチャンスかも）
これはオークションなんだから、
インランを装ってさっさと買い手がつけば終わるはず。
それに、こんなバカバカしいオークションに大金を出せるなら、
ひょっとすると“エクシライズ”も持っているかもしれない。
（恥ずかしがってる場合じゃないわ……）
私は意を決して口を開いた。
不自由な姿勢のまま、精一杯に大声をあげる。
「お……おねがい！　誰か私を買ってぇ！　めちゃくちゃにしてぇ！」
私の一言で会場はどよめいた。
「い……いっぱいご奉仕します！　だから、私を――」
『２０万ギル！』
『２５万ギル！』
全部言い終わる前に、あちこちで手が上がり始めた。
（やった……！）
『３０万ギル！』
『さ……３２万ギル！』
オークションはどんどん盛り上がる。
だけど司会は私よりずっと狡猾で、
高値で売り込むコツを知っていた。
「ひゃ、あぁ！？」
また私の胸を触り始め、今度は同時に股間も刺激してくる。
「ん、はぁ、ああ――！」
会場がどっとどよめき、値段はさらにどんどん上がっていった。
（感じてるフリしなきゃ……！）
私も精一杯に身体をくねらせて司会の責めに応える――。
『２００万ギル』
（え……）
一人の中年が明らかに異常な値段をつけ、会場が静まり返った。
『おっと２００万ギル！　これ以上はありませんね？』
（そんな……ありえない、２００万なんて！）
『ではそちらの紳士で決定です！
最後に余興として、淫乱な彼女にはステージで
イキ狂ってもらいましょう！』
「え！？」
おおおお、と会場がどよめく。
ステージに数人の男と女が上がってきて、私の身体に触れる。
それから私はステージ上でかわるがわる指や舌で責められ続け、
気絶するまで何度もイカされた……。

……。

目が覚めると、やたらと内装が豪華な部屋にいた。

『おめざめかい？』

裸の中年男性がちょうど部屋に入ってくる。

見覚えがある。私を２００万ギルで買い落とした人だ。

『フフフ…いいカラダしてるねぇ…

たっぷりとかわいがってあげるからね』

男はさっそく私を抱き寄せる。

（我慢しないと……）

色々ありすぎたせいで体力はまだ回復していない。

重い疲れが身体全体に残り、

特に下半身は焼みたいだった。

思考もうまくまわらず、

男が上機嫌に話すのを聞きながら

ついぼうっとしてしまう。

（とにかく……エクシライズのことを聞き出して……）

『さぁ、もっとこっちに寄って』

「はい……」

男の言葉に素直に従い身をまかせる。

『ステージではあんなに激しかったのに、

二人きりになるといやに大人しいじゃないか』

「それは……」

『緊張してるのかい？

いいね、そういう意外にうぶなところも』

部屋の照明は柔らかく適度で、ベッドもふかふかだ。

疲れた身体にその心地良さが染みこんできて

思わず無防備になってしまう。

「あ……う、はぁ……」

（しっかりしないと……）

そう思っているのに、相手はこんな中年男なのに、

居心地の良い部屋で

人肌に身をまかせる安心感に酔ってしまう。

「ん、ぁ……」

男の愛撫もゆったりとした優しいもので、

今の私はほとんど演技を抜きにして感じてしまっていた。

やだ……こんな状態じゃ、まずい……。
もっと意志を強く持って……っ)
「ん、はぁ、ぁ……」
だけど、男の指が優しく繊細に動くと
どうしても気が抜けてしまう。
「あ……！」
たまたま男の肌と胸がこすれて、私は甲高い声をあげた。
「ん？　胸が感じるのかい？」
男はそれに目ざとく反応して胸に手を伸ばす。
「う、んん、く……あぁ……っ」
「ほう……」
男の指がくりくりと動き、集中的に乳首を刺激する。
「ひゃ、はぁ、ああ！　ん、はぁ、はぁ……」
「何て敏感な乳首なんだ。これはいい買い物をしたな。」
満足気に言い、男はさらに私の胸に顔を近づけた。
「や、いや……」
正面から胸の谷間に顔をうずめて乳首にむしゃぶりついてくる。
「ん！　はぁ、ああう……く、はぁん！」

『大きさだけでなく形もいいし柔らかい。
堪能させてもらったよ』
「あ……」
ひとしきり楽しんだのだろうか、男の顔が胸から離れる。
『次はこっちが楽しませてあげよう』
言って、男が後ろから私を抱きかかえた。
「う、あ……！」
手が伸びてきてするすると股間へと入っていく。
ごく自然に、何の抵抗もなく私のあそこへと指が到達した。
「や、あぁ――」
指が動き始め、
くにくにとと柔らかく刺激されているのがわかる。
決して乱暴ではない。
私をいたわるみたいにゆっくりゆっくり丁寧で上げる。
「う、あ……はぁ、ん、はぁ……」
ぞくぞくと背筋を快感がのぼっていく。
激しさはないが、じわじわと性感を煽るような優しい動きに
私は全く抵抗できなかった。
「ん、ふぁ、あ……んん、く……」
私の呼吸に合わせて男の指が動く。
浅いところを弱めに刺激されているだけなのに、
胸がきゅっと切なくなるくらいに気持ちいい。
（この人……ほんとにうまい）
アソコから全身に広がっていく快楽と充実感。
「あ……や、だめ、イ、キそ……ん、うう……」
（私……何言って……）
思わず口にしてしまったセリフに赤面する。
けれど男は特に気にしたふうもなく、
ゆっくりと愛撫を続ける。
（もうダメ……！限界ッ……！）

●本気で抵抗する ↓ 48
●クスリをねだる ↓ 40

このままだと本当におかしくなる――。
そんな危機感をもった私は、
もう頭も何もなく単刀直入に男に尋ねる。
「あ、あの……エクシライズを知ってるのかね？」
『む？　エクシライズ……』
「あ、ほ、欲しくて……」
『ふぅむ。あるにはあるが……希少な品だからね。
交換条件といこうじゃないか』
男が私の耳に口を近づけて、あることを要求してきた。
男の要求はとても飲むことができないようなものだった。
（だけど……本当にエクシライズが手に入るのなら……）
わがままは言ってられない。
私は頷き、目を閉じて口を大きく開いた――。
『素直ないい子だ』
男が立ち上がり、ペニスを私の口内に挿入してくる。
「う……はむ、ん……」
それは大きく固く、口いっぱいに広がる。
（うう……エクシライズを手に入れたら、
キックの一発でもお見舞いして逃げてやるんだから……っ）
どうやら本物のエクシライズがあるらしいことがわかって、
私の身体と心はわずかではあるが活力を取り戻していた。
『もっと舌を絡めて』
「は……ふぁい、ん、ちゅ、れる、えろ……るる、じゅぼ！」
こんなくだらない行為はさっさと終わらせて
エクシライズを手に入れる――。
『裏筋のところと……袋もなめてみなさい』
「あ、はぁ、ん……ちゅ、んむ、れる、ん、んちゅ、ちゅぱ……！」
男の言うことに悪実に従いながら反応をうかがう。
自分で言っただけあって、
裏のスジになっているところが気持ちいいらしい。
「ん、はむ……、ちゅむ、ん、ちゅぷ……ふはっ。はぁ、あむ……」
舌と唇を使って集中的にペニスの裏を刺激した。
『よし、次は口で亀頭を含みながら、
舌先を伸ばして裏筋をなめてくれるかな？』
「……ん、んぉ……ふぁ、はむ……れる、れろ……」
（これ、ちょっと苦しい……）
喉の奥にペニスの先が当たりそうだけど、
精一杯舌を伸ばして動かした。
『くぉ……フフフ、一生懸命なのが良いね』

（こんな姿勢になるなんて……）
今度は寝転がり、お互いのアソコを舐めあう。
「んちゅ……はむ、ん、はぁ、ああ……！」
男に舐められると私はつい顔を上げてしまう。
「うぁ、はぁ、ああ……ひぅ！　ん、やぁん！」
舌の動きは決して激しくはない。
けれど確実にポイントを突いて、クリトリスも適度にしてくる。
「ああ、んんぅ！」
『自分が気持ちよくなるばっかりはいけないよ。
こちらも楽しませてくれないと』
「あ、は、ぅ……」ごめんなさ……
あむ、はむ、んちゅ、じゅぶ……じゅぼ、んふ……っ」
男に言われて口での奉仕を再開する。
でも――。
「ふぁあ、はぁ、ああん！」
クリトリスと、膣の浅いところを舌先で刺激されると
すぐに奉仕どころじゃなくなってしまう。
『そんな調子じゃいつまでたっても満足できないよ』
「あ、うぅ、んむ、はぁ、じゅぶ、じゅぼ……！」
（ダメ……この人、上手すぎる！
軽く舐められてるだけなのにすぐにイキそうに……！）
私は自分の快感から逃げるために、
目の前のペニスに奉仕するのに必死になった。
「はぅ、はむ……ん、れる、れろ……じゅぶ、じゅぼ、ちゅぶ……！」
そんな風にある意味『夢中』になってしまったのが、
私の最大の失敗だった。
「んん！？」
（な、なに……！？）
急にお尻に冷たさを感じた。
「あ、やぁ、んぅ……！」
その冷たさは一瞬で消えたが――強烈な目眩に襲われる。
「う……あ、はぁ、あぅ……！」
『ふふふ、今のが。エクシライズ』だよ。
肛門の粘膜から速やかにキミの身体に吸収されたはずだ』
「そ、そんな……！　私は、欲しくな……あ、いや、ああっ！」

キーンという激しい耳鳴の後、音の洪水が訪れる。
(え……なに……?)
空気のわずかな動きや自分と男の息遣い。
シーツの衣擦れの音の全てがやたらとうるさい。
「う、ぁぁ……」
(もしかして……これも覚醒効果……)
ざわざわとした感覚が肌の表面を駆け抜け、
全身に一気に鳥肌が立った。
それ収まると、触覚だけでなく触覚も急激に強まる。
「いや、ぁ……なに、これ……!」
自分の声による空気の振動が肌の表面にまとわりつき、
熱くうずくような快楽に変化していく――。
(嘘……声だけでこんな……
直接触られたらどうなるの!?)
そう思った瞬間に、男が私に抱きついてくる。
「あ――ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!!!」
男の体温のあたたかさと
肌と肌が触れ合う感触が訪れると同時に、
私は軽い絶頂に達してしまう。
「いや、ぁぁぁっ、はぁ、離し……てぇ!
ぁぁ、はぁ、こわい、いやぁぁ!」
『エクシライズはすごいだろう?』
言いながら、男は私の身体をがっしりとホールドする。
そして指先で乳首をくりくりと刺激してきた。
「ひ、ぁ、は――うぁぁぁ! ぁぁ、はぁ、んぅう!」
一瞬だった。
胸を愛撫されて私はまた絶頂にのぼりつめてしまう。
『一度、もともと敏感な頃に
エクシライズを使ってみたかったんだよ』
「はぁ、ぁぁぁ、う……はぁ、はぁ、はぁ……!」
男に抱きつかれている。男が耳許でささやく。
それだけで下腹の奥がきゅんきゅんと疼き、
頭には熱がこもる。
私は脱力してどっとベッドに倒れこんだ。

（エクシライズ……こんなに強烈なものだなんて……）
男に触られたところがちくちくとかゆい。
「はぁ、はぁ、はぁ……！」
誰かに触って欲しい。狂おしいまでの欲求。
（もう抵抗するとか、逃げるどころじゃないよ……！）
『ククク……キミにはエクシライズは強すぎるクスリだったかな？
お詫びに優しくしてあげよう』
「あ、やぁ、あぅ……こ、こない、で……」
男が手を伸ばし、脚のつけねあたりを触る。
「あ――」
どっしりとして肉厚の手のひら。
太股に触られた瞬間に広がる安心感と快楽。
その手が動き、脚のつけねあたりを全体的に撫でた。
「あ、ひぁ……あぁぁぁぁぁっ！」
それだけで絶頂の予感を抱いてしまうくらい気持ちいい。
「やめ、て……」
懇願して言って、男の腕にすがりつく。
『良いね……今からすることが楽しみだよ！』
「え……や、あ、はぁ、あぁぁぁぁぁん！」
男の手が股間へと動き、クリトリスを撫で上げる。
「あ、ああ――は、あぅ、うぅ……はっ、はぁ、はぁ！」
それは今まで味わったことのないような強烈な快感だった。
大きく口をあけて息をして、やっとその快楽に耐える。
でも……もはやそれは耐え続けることができるような
モノでないことは分かっていた。
「そうだ……そうやって体を快楽にゆだねなさい」
グチュグチュ
「あっ！ああっ！はぁぁっ！」
グチュグチュ
（あぁぁっ！大きいのが…来るッ！）股間アップ　光る
（体中に電気が…ッ！）体スクロール　電気
「イクッ…！ふぁ、あぁぁぁ、あぁぁぁぁっ！
あ、はぁ、イッくぅぅぅぅぅぅ！！」
全身の神経がショートするほどの激烈な快楽。
それが背筋を通って頭にまで伝わってきたとき、
私は一瞬気が狂いそうになった。

はぁぁぁぁ
ララララ!!
ビクッ
ビクビクッ
ビクッ
ビクッ

『さて……メインディッシュの時間だ』
男が言って、私の身体をひざの上に載せた。
「う……あ、やぁ、いやぁ……」
私の腰をがっしりと掴み、男がペニスの位置を合わせる。
「ま、まって！　お、お願い！　もう許して！　私、まだしたことなくて――」
『？　まさか……処女だとでも？』
「初めては、大切な人と……」
『ククク……ハハハハ！　このカラダ、この顔、この感度で初物とは！　２００万ギルでは安すぎたくらいだ』
「え、や、あ……やぁ、いやぁあ！」
満足気に笑ってから、男がゆっくりとペニスを挿入してくる。
『ほら、どんどん入っていくよ。早く逃げないともうそろそろ――』
カラダのなかで、何かがひっかかったような感触――。
「ひ、ああっ、いやああ、ああっ！」
私は本能的にそれが何であるかを察し、残った力を振り絞って暴れた。
男の手を振りほどこうとする。でも、がっしりと腰を掴んだ指を離すことはできなかった。一本も。
「はぁ、ああ、やあ……ああ、うぅ……！」
私が無力感に眉を落とすまでじっくりと待ってから、男は悪魔のような一言をつぶやく。
『さあ……大切な人のことを思いながら、処女を奪われてしまいなさい』
「う……あ、はぁ、い、あ……あ、あぁぁぁぁぁぁっ！！！」
ブッッ――。
何かが破れた音。同時に、熱さと快楽がお腹の奥にまで一気に侵入してくる。
「ああっ、ひ、あ、イッ……あああああっ！！！」
バチバチと快楽の電撃が脳内で弾けた。
エクシライズの効果で敏感になった私の身体。初めてだというのに、挿入されただけでイッてしまう。
『く……年甲斐もなくもう我慢できない……まずは一発、出させてもらうよ！』
「はぁ、ひあああ！　あ、や、あぅ、ん、んんぅう！」
男がガッガッと激しく腰をピストンし、先端を一番奥――子宮へと叩きつけてくる。
『うおおおっ！』
「――！？」
びゅく、どぷ、どぷ――！
「あ、はぁ、ああぁ、あああああああああああっ！！！」
エクシライズで覚醒した感覚は、子宮に熱い精液を注がれる感覚を当たり前のように詳細に捉える。
イキッぱなしで収縮を繰り返す膣襞は、そのどろどろした熱い汁を全て子宮内に取り込む。
『ふぅ……さて、次にいきますか』
おまけに男のものは全然萎えていなかった。
「あ、はぁ、ああぁ、やぁ……っ」
残り汁を私の胎内に吐き出しながら、またピストンし始める……。

エクシライズの効果は絶大だった。
あれから10時間以上経っているのに、まだ効果は切れていない。
「あぐ……はぁ、あう、うう、うあ……」
間抜けな声がずっと耳許から聞こえてくる。
それは――私の喘ぎ声。男に突かれるまま、ずっと垂れ流している。
エクシライズのせいで、私は寝ることもできず常に大小の絶頂の波に襲われ続けていた。
「く、ふぅ、おお……！」
男も汗だくになりながらずっと私を犯し続けている。男のほうも何かクスリを使っているのか、何度出しても一向に萎えなかった。
「あぁ、はぁ、うう……あ、やぁ……」
お腹の奥で……重い液体がたぷたぷと鳴っている。
それは子宮に直接注がれ続けた白濁だった。
なにしろ男のペニスで栓をされてるようなものだから、ずっと私のなかに溜まり続けている。
（もう……イヤ……）
私の初めてを奪ったおち○ちんが、一度も抜かれることなくずっと私のなかにいて、何度も何度も射精した。
もう私の陰唇は、完全にこの男の形を覚えてしまっただろう。
（諦めちゃダメ……あきらめちゃダメ……、だけど……）
意志も理性も、快楽と絶頂の波がすべてさらっていってしまう。
『う……そろそろ抜かず7発目！』
「やぁ、ああ……もう、無理……入らな、あ、はぁ、ああ……」
男の身体に手をついておしのけようとする。けれどこんな弱々しい力で男を止めることなんてできるわけがなくて――。
「あ、はぁ、ああ……！」
『うおお！』
「ひ、うぁ、はぁ、ああ――うあああああぁぁぁあん！」
（また……なかに……！）
また下腹の奥に熱が注がれる。
いったいいつになれば、この時間が終わるのだろう。
もしかしたら私はずっと、永遠にこの男に――。
それだけも諦めなければきっとチャンスはあるはず。そんな言葉は虚しく胸のなかを通りすぎていく。
――ああ。
また男が腰を降り始めた……。

END

この本は同人ソフト
「もっと抵抗するティファ」のＣＧを収録して
編集したものです。

２００10年　９月１５日発行

もっと抵抗するティファ

発行／クリムゾン
http://www.alles.or.jp/~uir

印刷／大陽出版株式会社

男の要求を飲むことはとてもできない。
「もう……これ以上はダメ！」
ろくに力の入らない身体を叱咤し、
最後の力を振り絞って男を跳ね飛ばした。
「な、なにをする！」
「く……！」
うろたえる男を横目に、
私はベッドサイドにあった大きな窓に飛びつく。
下を見ると――３階くらいの高さ。
（これなら何とかなる……！）
そのまま窓に飛び込み、
身体をひねって何とか受身をとりつつ着地する。
路上駐車してあったバイクに飛び乗って
私はその場を後にした……。

結局“エクシライズ”は手に入らなかった。
だけどまたチャンスはあるはず――。
ひとまず潜伏しながら様子をうかがい、
別の手段を探すことにした。
（クラウド……待っててね……）

END